

老人が若嫁を
村の青年に寝取られる
目の前で
愛する嫁の膣内に
抜き挿しされる
青年の巨根

老人が村の青年に寝取られた若嫁

目の前で愛する嫁の膾内に

抜き挿しされる青年の巨根

2日前から続いていた嵐は今朝、暁が顔を出す前に通り過ぎてしまった。

まるで暗闇の世界に吸い込まれてしまいそうな真っ暗な空は明け、残ったのは雨粒が光る広大な地面。

そしてワシは抜け殻になってしまった。

嵐と重なったのは単なる偶然。

しかしワシの心には家の外を吹き荒れる大嵐など遥かに凌駕するほどの壮絶な絶望が渦を巻いた。

昨夜、ワシは村の若者に寝取られてしまったのだ。

最愛の若嫁を・・・。

「爺さん！親の恨みだ！」

そう叫んでワシの屋敷に忍び込んできたのは村人のタンタ。

ワシはタンタの親との間にいさかいがあった。

この辺一帯の領主の一人であったワシが昔、奴の親に領土を分け与えなかったことで、以降家人単位でワシを嫌らうており、ワシもそれを知っていた。

しかし・・・。

どう考えても罰が大きすぎるわい。

ワシが土地持ちの貴族だったのは昔の話。

今では沈みゆく光のように力のなくなった老いぼれの屋敷に、タンタはとんでもない復讐にやって来たのだった。

今年の如月にうちへやってきた新しい花嫁の名はマキノと言う。長らく共に生きてきた嫁が病死し、彼女はやって来た。50を超え死期すら近づいておるワシにとって22のマキノはまるで娘のような嫁だった。

以来、同じ布団で夜を共にして来た。

今では淫欲こそ減退し、ほぼなくなってしもうたが、それでも肉体の底から無いものを半ば無理やりにひねり出し、褥を共にしたこともあった。

「積年の恨みだ、これを見ろっ！！」

叫んでタンタが取り出したのは、いきり立った馬鹿デカイ怒張。チンポだ。

布団の上で腰を抜かしているワシをまるで見下すかのように、反り返った裏筋がビクンビクンとこむらがえりを起こしたようにひきつっておった。

ワシは、もうこの時点で奴に一本取られておったのだ。

嫁のマキノは、すでにワシの知らぬところでタンタと切っても切り離せない関係になっておったのだ。

思い返せば・・・もはや悔やんでも遅いが、マキノはここ最近、不可解に思うくらい何度も、ワシに用も告げずに外出していたことがあった。

それでもまさかこんなことになるとは・・・。

複雑、という言葉では言い表せない想いが駆け巡り、ポカンと口を開けるワシにタンタは続けた。

「このイチモツで、俺はあんたの嫁のマキノを死にも相当するくらいの快樂で悶えさせているのだ。あんたが知らぬ間になっ！」

こんな無防備な寝間では金持ちの威厳も権力も圧力も何もない。寝間着一枚で呆然とする老人の部屋に、若者の怒号だけが響いている。

「会うたびマキノと二人で極楽浄土へと昇っているんだ！！ズボズボと何度も入れて、マキノのマンコの内側でこのチンポをかき回して・・・どれだけ凄いと思う！！」

怒りに震える肩。それでも奴の言葉はしっかりと耳に届いてくる。突き刺さるように！！

「快樂に狂い叫び、こいつは会うたびに俺のチンポを求めてくるんだぞ！あんたにとっちゃこれほどの屈辱はないだろうなあ！」

当然ながら、もうこの時点でマキノはタンタの味方であった。タンタに駆け寄って、奴の背中に隠れながらおびえた視線をワシに向けている。涙ぐみながらも、タンタのその力強い言葉に嬉しそうに頬を赤らめているようだった。

体験版はここまでです。

もし気に入っていただけましたら、

続きを製品版でお楽しみいただけると幸いです。